

8 脊髄損傷女性の月経・出産・更年期・婦人科疾患に関する調査研究

— 第一報 受傷後の月経と婦人科疾患 —

病院看護部 道木恭子、堀 房子、山中京子、富岡佳代、斉藤文子、宮坂良子、古田佳奈代
新潟県立看護大学 栗生田友子

【目的】脊髄損傷女性（以下脊損女性）の月経、出産、更年期、婦人科疾患に関する現状は明らかにされていない。本研究は、脊損女性の健康問題に着目し、受傷後の月経と婦人科疾患および受診に伴う問題を明らかにすることを目的としたものである。この研究結果から脊損女性の健康上の問題を明確にし、今後の支援策を検討したい。

【対象と方法】本研究の対象は18歳以上の脊損女性である。2006年8月から9月にかけて日本せきずい基金を通じて無記名自記式質問紙調査票を郵送し、回答の得られた126名のデータを集計した。

【結果】

1. 受傷後の月経：受傷後に月経が通常のカイクルで再開した人は30名（30.9%）、1ヶ月以上停止した後で再開した人は47名（48.5%）であった。月経再開までの平均期間は9ヶ月（3ヶ月未満18名、4～6ヶ月11名、7～9ヶ月4名、10ヶ月以上14名）で、最長5年8ヶ月であった。一方、再開しなかった人は5名（5.2%）で、4名は閉経期にあたるが、1名は再開していない状態である。また、月経に伴う問題として、「瘻性が強くなる」「尿が漏れて困る」「尿が濁る」「脊髄梗塞でワーファリンを内服しているためか、出血が多くて困る」「ナブキン交換をヘルパーにしてもらわなければならないから、子宮をとってほしい」など深刻な問題が把握できた。

2. 産婦人科疾患：受傷後に産婦人科を受診した人は78名（63.9%）で、受診目的はがん検査（36名）、帯下に関する相談（33名）、月経に関する相談（23名）、妊娠検査（8名）などであった。診断結果は妊娠（16名）、子宮筋腫（11名）、排卵障害（5名）、子宮内膜症（5名）、膣感染症（5名）などであった。婦人科疾患については、「下半身の知覚がないから手遅れになったら・・・という不安を常に抱えている」という意見もあげられた。

3. 受診に伴う問題：「内診台にあがれない」「診察台が身体に合わなくて痛い」「マンモグラフィが受けられない」「頸髄損傷なのに『立ってください。』と言われた」「脊損はわからない」と、医師が話を十分に聞いてくれない」「脊損だから痛みがないと思われている」などの現状と問題点が把握できた。

【考察】月経、婦人科疾患に関する問題は脊損者に限らず体験されると考えられるが、脊損女性の抱える問題には受傷による身体の変化とADLの低下が影響していた。月経は毎月のことであるから月経に対する苦痛を軽減するためにも、不快症状の対処法や、ナブキン交換などのセルフケアを入院中の訓練に取り入れるといった視点を医療者が持つ必要がある。また、脊損女性が婦人科を受診する率は低いと言われていながらも、結果から6割の女性が受診しており、健康に対する関心が高いとも、必要に迫られて受診したとも考えられた。脊損女性が困難を抱えながらも受診している現状を大切に受け止め、病院環境の整備と脊損女性に関わる医療者の教育的なアプローチが必要と考える。